

インテル (INTC)

【セクター】 半導体製造装置

信買

【市場】 NASDAQ

信売

【企業概要】

世界最大級の半導体メーカー。かつて「intel inside (インテル入っている)」のキャッチフレーズで一世を風靡しました。主力製品は、PC向けCPU (中央演算処理装置) とデータセンターのサーバー向けCPUです。近年はIoT (モノのインターネット) 事業も展開しています。主要部門の売上高構成比 (23.12期) はクライアント・コンピューティング (主にPC向けCPU) が54.0%、データセンター (主にサーバー向けCPU) & AIが28.6%、ネットワーク&エッジが10.6%です。

【業績】 (単位: 売上高、純利益は百万ドル、EPS、1株配当、BPSはドル、ROE、自己資本比率は%、純利益、EPSは調整後ベース)

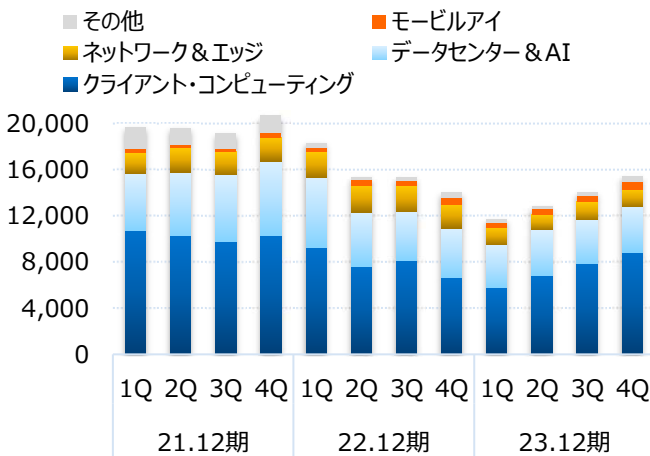
決算期	売上高	純利益	EPS	1株配当	BPS	ROE	自己資本比率
22.12期	63,054	3,856	0.93	1.46	23.4	22.5	56.6
23.12期	54,228	1,482	0.35	0.74	25.0	1.6	57.4
24.12期 (予)	58,057	5,934	1.42	0.52	24.4	4.7	-

※EPS: 1株当たり利益、BPS: 1株当たり純資産、ROE: 株主資本利益率

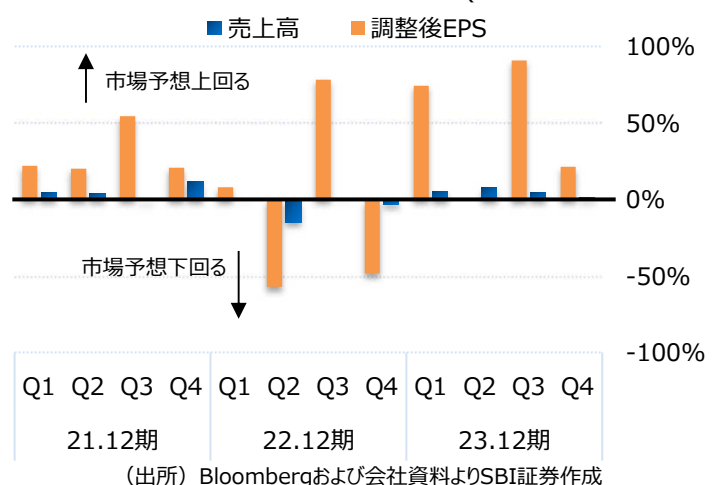
(出所) BloombergのデータよりSBI証券作成

【主要指標】

部門別売上高の推移 (百万ドル、四半期ベース)



売上高と調整後EPSの対市場予想比(%、四半期ベース)



【会社の見方】

設計から製造までを自社で行う垂直統合型を採用してきた半導体の「巨人」です。しかし、半導体業界での水平分業の進行と同時に、インテルは最先端の微細化技術で遅れをとるようになりました。今や製造技術では半導体受託製造大手のTSMCに優位性を譲り、主力のCPU市場 (特にサーバー向け) ではTSMCを活用しているAMDにシェアを奪われています。挽回を図るべく、2021年に外部ファウンドリーの利用拡大やファウンドリー事業への参入を含む「IDM2.0」戦略を発表し、2025年までの新しい技術のロードマップも公開。復活のシナリオを示したことは評価ポイントと言えます。他方、戦略の実施には莫大な投資と時間もかかる想定されます。復活戦略の実施状況と業績面の成果の有無が注目ポイントとなります。

【見通し・注目点】

23.12期4Q実績は市場予想を上回りましたが、24.12期1Qの売上高ガイダンスは市場予想を11%も下回り、ネガティブ・サプライズでした。パット・ゲルシンガーCEOは季節要因 (①) と説明。市場シェアの低下 (②) は見当たらないと示しました。新製品のラインアップや「AI PC」を追い風に1Q以降は回復を見込み、決算後の株価急落は「やや過剰反応」との見方を示しました。①と②は競合の決算でも確認する必要があり、インテルの復活は2Q以降の業績も確かめる必要がありそうです。

## 本レポートに関するご注意事項

- ・本資料は投資判断の参考となる情報提供のみを目的として作成されたもので、個々の投資家の特定の投資目的、または要望を考慮しているものではありません。投資に関する最終決定は投資家ご自身の判断と責任でなされるようお願いいたします。万一、本資料に基づいてお客様が損害を被ったとしても当社及び情報発信元は一切その責任を負うものではありません。
- ・本資料は著作権によって保護されており、無断で転用、複製又は販売等を行うことは固く禁じます。本資料の内容は作成時点のものであり、信頼できると判断した情報源からの情報に基づいて作成したのですが、正確性、完全性を保証するものではありません。本資料に記載の情報、意見等は予告なく変更される可能性があります。

## 手数料及びリスク情報等

- ・SBI証券で取り扱っている商品等へのご投資には、各商品毎に所定の手数料や必要経費等をご負担いただく場合があります。また、各商品等は価格の変動等により損失が生じるおそれがあります(信用取引、先物・オプション取引、商品先物取引、外国為替保証金取引、取引所CFD(くりっく株365)では差し入れた保証金・証拠金(元本)を上回る損失が生じるおそれがあります)。各商品等への投資に際してご負担いただく手数料等及びリスクは商品毎に異なりますので、詳細につきましては、SBI証券WEBサイトの当該商品等のページ、金融商品取引法等に係る表示又は契約締結前交付書面等をご確認ください。